

紹介

国際辭賦學學術研討會について

——あわせて辭賦研究の動向にふれて——

谷 口 洋

奈良女子大學

近年、中國においては、文學研究の分野でも、さまざまなテーマを掲げた學術研討會が花盛りで、應接に暇がないほどである。ここに紹介しようとする国際辭賦學學術研討會は、それらの中では、規模も小さく、テーマも地味であり、決して目立つものではない。しかし、その着實な歩みと堅實な運営は、十分特筆に値するものである。また、回を重ねるにつれ、辭賦研究の方向性や新たな展開が、次第に見え始めたように思われる。ここでは、国際辭賦學學術研討會の歩みを略述しつつ、そこにみられる辭賦研究の流れについても言及してみたい。なお、ここで「辭賦研究」

紹介

というときは、もっぱら『楚辭』を論じたものは含めないことにする。

一 国際辭賦學學術研討會の發足まで

国際辭賦學學術研討會は、一九九〇年に開かれた「首届国際辭賦學學術討論會」を起點として、これまでに六回開かれているが、その前史にあたる中國國內での動きと、當時に至るまでの學術的な環境の變遷について簡単にふれておこう。

辭賦に関する研究組織の設立は、一九八四年一月、長沙において中國韻文學會が成立し、そのもとに賦學研究會がおかれたのがはじまりである。その後一九八八年四月二十五日―二十九日に、全國韻文學會賦學研究會・湖南省古典文學研究會・湖南師範大學・衡陽師範專科學校の共催で、湖南省衡陽市南岳において「首届賦學討論會」が開かれた。

李生龍「全國首届賦學討論會綜述」（『社會科學戰線』一九八八年第四期）によれば、全國十五の省・市から、八〇人以上の學者が集まり、論文四〇篇が提出されたという。中心的

論點は、辭賦の歴史的地位、辭賦の起源と辭・賦の概念、漢賦の價值、作家作品研究などであつたようだが、發表者や論題は記されていない。

翌一九八九年一〇月には、全國賦學研究会・四川師範大學・江油李白故里酒廠の共催で、四川省江油において「全國第二回賦學討論會」が催された。このときの論文の一部は、一九七九―一九八九年の間に雑誌に發表された論文から選んだものと合わせ、萬光治氏の「賦與賦學研究的命運」と題された長文の序をつけて、『賦學研究論文集』（馬積高・萬光治主編、巴蜀書社、一九九一）として出版されている。

こうした動きは、八〇年代の中國大陸において、學術研究が文革による沈滞からようやく脱し、多くの學會が精力的な活動を開始するようになることと軌を一にするものではある。ただ、解放後のマルクス主義文學史觀のもとでは、辭賦、とりわけ漢賦は、「形式主義」「生活の現實を反映していない」「統治階級に奉仕する御用文學」といった否定的評價を浴びせられ、そもそもまともな研究對象となつて

こなかつた。いま霍松林主編『辭賦大辭典』（江蘇古籍出版社、一九九〇）附載の「辭賦研究論著索引」によつて數えると、一九四九年から一九七九年までの辭賦に關する論文は一一〇編餘りを得るが、その内譯を對象となつた作家ごとに見ると、陸機二八篇、宋玉二三篇を筆頭に、枚乘一二篇、庾信・蘇軾各九篇、杜牧七篇などとなつており、これらの合計で全體の八割近くにもなる。一方漢賦總論は七篇、司馬相如は四篇、揚雄はわずか一篇、班固・張衡ら後漢の賦家については、一篇の論文も發表されていない。つまり、特定の作家の特定の作品が、時に論點となるに過ぎず、辭賦研究というまとまつた分野はなかつたのである。

もちろん、文革がその傾向を助長したことはいうまでもない。朱一清「近年漢賦研究總述」（『文史知識』一九八四年第二期）によれば、一九六三年から一九七八年までの間には、漢賦に關して一篇の論文も書かれなかつた。また、龔克昌氏が回想するところでは、一九六二年に論文「漢四家賦初探」を提出して大學院（三年制）を修了し、いったんは論文の出版まで決まつたにもかかわらず、その題目を

名指して批判する大字報が張り出され、指導教官であった陸侃如氏にまで累が及んだため、一九六六年九月のある晩、原稿をすべて焼いてしまったという（『我研究漢賦的前前後後』、『漢賦研究』、山東文藝出版社、一九九〇増補版所収）。

それが八〇年代に入ると、龔氏より上の世代による姜書閣『先秦辭賦原論』（齊魯書社、一九八三）と『漢賦通義』（同社、一九八八）、馬積高『賦史』（上海古籍出版社、一九八七）、龔氏自身の『漢賦研究』（山東文藝出版社、一九八四初版）、さらに若い世代による萬光治『漢賦通論』（巴蜀書社、一九八九）など多くの著作が相次いで出版された。論文に至っては、漢賦を扱ったものだけで、一九七九年から一九八三年までの五年間に四〇餘篇（朱一清、前掲文）、辭賦研究全體では、八〇年代の論文總數は、大まかな見積もりでも三〇〇篇近くに達するという（李生龍『近十年辭賦研究述評』、馬積高・萬光治主編前掲書所収）。それは、單に文革の十年の空白を埋めるといふにとどまらず、辭賦という忘れられた研究領域を改めて見つめ直してみようという、當然の學術的欲求の反映であった。

紹介

それでは、この時期の他の地域における辭賦研究の状況はどうだったのだろうか。許結『二十世紀賦學研究的回顧與瞻望』（『文學評論』一九九八年第六期）では、五〇年代から八〇年代初めまでの辭賦研究について、大陸ではほぼ空白であったのに對し、香港・臺灣と海外の研究は著しい成果があったとする。特に歐米については、ウェイリーやファン・クーリックなど少し前の時代にまでさかのぼり、錚々たる大家の名前を列擧して、彼らの研究が、作品の翻譯と紹介から、史實の考證や理論的究明へと進んできたことを述べている。確かに、この時期に歐米で刊行された辭賦に關連する書物を擧げると、ヒュース Ernest R. Hughes, "Two Chinese poets: vignettes of Han life and thought" (Princeton University Press, 1960. 題ひめる「二人の詩人」とは班固と張衡を指す）、ワトソン Burton Watson, "Early Chinese literature" (Columbia University Press, 1962) および "Chinese rhyme-prose: poems in the form from the Han and Six Dynasties periods" (Columbia University Press, 1971) ヘルヴエ Yves Hervouet, "Un

poète de cour sous les Han : Sseu-ma Siang-jou" (Presses universitaires de France, 1964) 許世英 "Le chapitre 117 du Che-ki : biographie de Sseu-ma Siang-jou" (Presses universitaires de France, 1972) ハイタワール James Robert Highower, "The poetry of 'T'ao Ch'ien" (Clarendon, 1970) フネクタス David R. Knechtges, "The Han rhapsody : a study of the fu of Yang Hsiung" (Cambridge University Press, 1976) などがあり、特にワトソン・エルヴェ・コネクタスの各氏は、難字や連綿語の多用、朗誦の問題など辭賦の特質について、それぞれの立場から論及している。歐米文學の中に類例を見出しがたく、西洋語に翻譯することすらおぼつかない、辭賦というジャンルの特性が、絶えず研究者の注意を集めてきたことがうかがえる。

それに比べると、臺灣や香港では、確かに辭賦研究は繼續して行われてはいたものの、盛んであったとは必ずしもいえない。馬積高『歷代辭賦研究史料概述』(中華書局、二〇〇二)が指摘するように、論文や著書が増加するのは、七〇年代も後半になってからであり(一七二頁)、しかも大

陸との學術的交流が少なく、研究の視點も異なるにもかかわらず、大陸の文學史と同様に漢賦に對しては批判的で(張清鍾『漢賦研究』[臺灣商務印書館、一九七五]解題、二五九頁)、作者の個性とロマン的情感が評價の尺度となっているのは、大陸で五〇年代から六〇年代に流行した見方と似ている(張書文『楚辭到漢賦的衍變』[正中書局、一九八三]解題、二六八頁)。一つ補足するなら、論文で取りあげられる對象は、宋玉、王粲、曹植、陸機、庾信、蘇軾など、一部の著名作家に集中しており、それらの多くは實は大陸でも論文が發表されていたものであった。香港・臺灣の辭賦研究には、大陸のような政治の影響はなかつたにもかかわらず、その趨勢には大陸と共通するところもあつたのである。もちろん、何沛雄『賦話六種』(萬有圖書、一九七五、生活・讀書・新知三聯書店、一九八二增訂)や簡宗梧『漢賦源流與價值之商榷』(文史哲出版社、一九八〇)のような着實な研究成果の結實も、次第に現れてはいたのだが。

我が國における辭賦研究については、稿を改めて検討するつもりであるが、この時期に『楚辭』研究が非常に活發

であつたのに對し、漢代以降の辭賦に關する關心は高かつたとはいえない。もちろん、吉川幸次郎「司馬相如について」(全集第六卷、初出は『敘説』五、一九五〇)、金谷治「賈誼の賦について」(『中國文學報』八、一九五八)のような影響力のある論文もいくつか書かれたが、鈴木虎雄『賦史大要』(富山房、一九三六)を繼ぐまとまつた研究としては、

中島千秋『賦の成立と展開』(關洋紙店、一九六三)が、ほとんど孤立した存在であつた。その中で研究者の注意を比較的集めたのは、香港や臺灣と同様、建安や陶淵明の抒情小賦であつた。そうした狀況に變化が現れるのは、七〇年代半ば、小尾郊一氏によつて、『文選』に收める賦の全譯がなされた(集英社「全釋漢文大系」、一九七四)ころからであるうか。

こうしてみてくると、作家の個性や情感の表出を重視する文學觀は、イデオロギーを超えて、一定の影響力を持っていたようだ。馬積高氏も言うように、このこと自體が考察に値する問題であるうが、ここであえて思いつきを言うなら、中國文學においては、古來詩は志を言うものとして、

情感の表出と見られてきたし、「知人論世」というように、それを作者の境遇や人格に結びつける傾向が強かつた。その傳統が、「個性」「浪漫主義」といつた「近代」的言辭によつて強化され、そうした「近代」的文學觀に合わない辭賦——とりわけ漢賦を、研究者の視野から遠ざけてきたのではなからうか。

歐米はともかく、全體としてみれば、第二次大戰後かなりの期間、辭賦研究はいささかの沈滞を免れなかつたのだが、その沈滞が打ち破られ始めたのと時を同じくして、中國大陸から續々と成果が發信され始めたのである。辭賦に關する國際學會の開催は、中國大陸以外の研究者にとつても、必然的要求であつた。そのような狀況の下で、一九八八年から一九八九年にかけて、山東大學の龔克昌氏が米國に招かれた折、ワシントン州立大學(シアトル)のコネクタス氏との間で、國際賦學研討會の開催を約束し(『漢賦研究』増補版「補記」、ここに辭賦に關する最初の國際學會が實現することとなつたのである。

二 國際辭賦學學術研討會の歩み

以下に、これまで開かれた六回の會議について、簡単に記しておく。

首届國際賦學學術討論會 一九九〇年一〇月一五日～二〇

日 濟南市南郊飯店（主催：山東大學ほか）

中國大陸はもとより、コネクタス氏ら米國の研究者、臺灣や香港、さらには日本・韓國からの参加をも得て、四〇餘篇の論文が提出された。山東大學では、『文史哲』一九九〇年第五期を「首届國際賦學學術討論會論文專輯」にあて、二七篇の論文と一篇の要旨を掲載した。發行は討論會に先立つ九月二四日となっており、おそらく會にあわせて刊行されたのであろう。翌一九九一年の『文史哲』にも、この

研討會に提出されたと見られる論文が數篇收められているほか、同年第三期には、唐子恒・李緒武・彭行「首届國際賦學學術討論會綜述」を掲載する。なお、この會は我が國でも注目され、一九九一年の『日本中國學會報』第四三集「學界展望・文學」（早稻田大學擔當）にもふれられている。

第二屆國際賦學學術研討會 一九九二年一〇月二八日～三一

日 香港中文大學（主催：香港中文大學中國文化研究所）

参加者は、會場で配布された資料によれば五一人だが、そのうちオプザーバーとして参加した者が筆者を含め六名おり、缺席者も數名いたため、實際に出席して論文を發表したのは四〇名に満たなかった。このときの論文三四篇は、饒宗頤氏の講演と合わせ、『新亞學術集刊』第一三期「賦學專輯」として、一九九四年に刊行されている。内譯は、中國大陸一四、香港・マカオ一二、臺灣五、米國・韓國・日本各一。筆者はこのとき初めて出席したが、参加者こそ少ないものの、發表内容も運営もすばらしいことに、大變感銘を受けた。

第三屆國際辭賦學學術研討會 一九九六年二月二〇日

～二二日 臺北・國立政治大學（主催：國立政治大學文學院・國立暨南國際大學中文研究所・ワシントン州立大學）

このときから、會の名稱が「國際辭賦學學術研討會」と改められた。會議のプログラムによれば、發表者は六三人であり、そのうち五五篇の論文は、會に合わせて『第三屆

國際辭賦學學術研討會論文集』（上下二冊）として、政治大學より出版された。臺灣の辭賦研究の中心である簡宗梧教授のもとでの開催とあつて、臺灣の、特に中堅・若手の研究者が多く参加していた。臺灣海峽兩岸の自由な往來が實現しない状況の中で、臺灣勢に劣らぬ數の大陸の學者が、香港經由で駆けつけたのも印象的であつた。

第四屆國際辭賦學學術研討會 一九九八年一〇月二二日

一〇月二五日 南京・狀元樓酒店（主催：南京大學中文系、同古典文獻研究所）

閉會式で読み上げられた綜述によれば、米國・日本・韓國・シンガポール・香港・臺灣・マカオ・中國大陸から五〇名の参加があり、論文四九篇が發表されたという。會場で配付された資料には、他にオブザーバーとして中國文化大學（臺北）の院生四名の名が擧がっているが、それ以外にも、南京留學中の日本人院生數名が臨席していたのを記憶している。この會議では、「二〇世紀辭賦學研究的回顧と展望」がテーマの一つに擧げられており、何新文「近二十年大陸賦學文獻整理的新進展」、簡宗梧「一九九一—

一九九五中外賦學研究述評」の二つの報告がそれにあてられた。このときの論文四七編は、「開拓辭賦學研究的新天地」と題された綜述とともに、『辭賦文學論集』として、一九九九年に江蘇教育出版社から出版された。

第五屆國際辭賦學學術研討會 二〇〇一年一月一七日

一〇月二〇日 漳州師範學院國際學術交流中心（主催：漳州師範學院中文系、共催：集美大學師範學院中文系）

主催者の發表では、海外の二三人を含む六五人の参加があつたという。「海外」の内譯は臺灣六、日本三（うちオブザーバー二）、韓國三、シンガポール一。この年九月に米國で起こつたテロ事件はこの學會にも影を落とし、コネクタス教授が参加を取りやめた（ただし論文は提出されている）。また、長く中國賦學會の會長を務めてきた馬積高教授が世を去り、第二回以來参加を續けてきた清水茂教授も御高齢のため参加を見合わせるなど、いささか寂しさを感じなくなつたが、若い研究者の参加も増え、新たな動きを感じさせる會であつた。論文五四篇が、『辭賦研究論文集』として、二〇〇三年に中國文史出版社より刊行された。

第六屆國際辭賦學學術研討會 二〇〇四年一月一日

一三日 四川省金堂縣 綠島會議中心（主催・四川師範大學文學學院・巴蜀文化研究中心・文理學院）

開會式における萬光治教授のあいさつで、六三篇の論文が集まったとの報告があった。参加者名簿によって数えると、中國大陸の研究者のほか、香港一名・臺灣一四名・韓國二名・日本一名である。論文集は、すでに出版されているかとも思われるが、筆者のもとには今のところ届いていない。なおこの會に關しては、『文學遺產』二〇〇五年第一期に簡単な報告があり、論文七〇餘篇を受け取ったというが、その中には當日出席しなかつた者も含まれている。毎回この會に参加して感じることは、運営する方も参加する方も實に眞摯だということだ。筆者が初めて参加した香港の會では、朝九時から夕方五時過ぎまで、中座する者もほとんどおらず、晝食と午前・午後各一回のティータイムをはさんで、きわめて中身の濃い討論が續いた。一人一分の發言時間を、どの發表者もきっちり守り、質問する方も、發表者を無視して自説を述べたてたり、ささいな揚

げ足取りをしたりすることはなかつた。中國の學會では、發表者の言いつ放しに終わることもないではないが、この會ではそのような經驗をしたことがない。

自發的な討論がいかにも重視されているかは、しばしば變更される會の進め方に如實に現れている。第二回では、分科會を設けず、四五人の發表ごとに二五分間の全體討論を設けていたが、第三回以降は、二ないし四の分科會に分かれた上で、参加者全員がコメンテーターを分擔する形に改められた。特に最近の第五回・第六回は、各分科會の人数を二〇人程度に抑えた上、全員で机を圍む圓卓形式をとる、進行もかなり司會の裁量にゆだねられて、くつろいだ雰圍氣で行われた。こうしたサロン風のスタイルは、近年参加した中國の他の學會でも經驗したから、あるいは當節の流行なのだろうか。

もちろん問題がないわけではなく、たとえば分科會の分け方には、特に基準があるようには見受けられないため、興味ある發表を聞き逃すことも起こる。また、數日の間に何十篇もの論文を讀み通すことは不可能だし、論文自體も

すべてが最高水準というわけにはいかない。もともとこれらは中國の學會に共通する問題點であり、この學會では、各分科會にノートパソコンを持った院生が臨席してその場でレポートを作成し、翌朝にはそれを編集した「簡報」を全員に配布して、他の分科會の狀況がわかるような配慮が最近なされるようになった。何より、日本の學會で時に感じる、他人の發表を品評するような冷たさがここにはなく、發表者の問題意識を共有し、それをめぐって議論することに最高の目的を置くという、相互の協力關係ができあがっている。

このように良好な學術的雰圍氣が形成されていることの影響には、この學會が、五〇人から六〇人という、顔の見える規模で開かれていることがあるだろう。しかもそのうちかなりの部分は、ほぼ毎回参加している常連であり、筆者なども、参加するたじなみ顔を見つけ、懐かしい気持ちになる。もちろん、發足から一〇年を過ぎ、世代交代も始まっており、これまで多くの辭賦研究者を育ててきた臺灣はもとより、山東大學・四川師範大學・南京大學・

西北師範大學などの中心メンバーのもとで學んだ若手が、研究者として参加するようになってきている。この學會を軸として、辭賦研究のコミュニティというべきものが育っているのである。

しかもそのコミュニティがなれ合いに陥ることなく、相互批判の場として機能している。前回の成都の會議では、討論の中で、「實證性」「文獻依據」という言葉を何度か耳にしたのが印象に残っている。近年は特に、實證性を缺いた發表、文獻の扱いに問題のある發表には、忌憚ない批判が浴びせられるように見受けられる。辭賦研究に限らず、これまでの中國大陸での古典文學研究には、ややもすれば性急なイデオロギー的論斷や、表面的な觀察が見られたが、近年はそうした傾向が薄れ、實證性が重んじられる方向にある。逆に、昔ながらの考證學を受け継いできた臺灣の學界は、近代の文學理論や、美學・民俗學など周邊領域の成果を積極的に吸収するようになってきている。兩岸の學術交流が深まる中で、問題意識と方法論の共有が進みつつあることを、討論からもうかがうことができる。

三 國際辭賦學學術研討會を通して見た 辭賦研究の動向

このあたりで、もう少し研究の内容に踏み込んで、近年の辭賦研究の方向性について展望してみよう。一般に辭賦といえは、まず漢賦が想起されるのであり、事實、これまでの研究も、少なくとも書物としてまとめられたものは、はじめにいくつか例を挙げたように、漢賦を扱ったものが多かった。八〇年代に開かれた中國國內の二回の學會でも、あわせて七〇篇あまり寄せられた論文のテーマは、賦の形成、辭と賦の関係、漢賦の研究などに集中しており、魏晉南北朝以降、なかんづく唐以降の賦は、あまり研究者の注意を引かなかつたという（馬積高、前掲書、一七五頁）。ところが、國際辭賦學研討會に提出された論文を眺めていると、漢賦の研究はむしろ少数であり、取りあげられる時代は實にバラエティに富んでいる。『文史哲』に掲載された第一回の論文では、漢賦を扱ったものは全體の約三分の一であり、第二回以降はむしろそれより少ないくらいである。こ

の時期の辭賦研究を概観したものととして、簡宗梧主編『近五年（一九九一—一九九五）中外賦學研究評述』（臺灣行政院國家科學委員會專題研究計畫成果報告、一九九七）があるが、そこに著録された論文は、臺灣や日本のものを含むため、單純な比較はしにくいとはいえ、やはり同様の傾向を示している。こうしてみると、八〇年代と九〇年代で辭賦研究の方向が變わつたことがうかがえる（別表參照）。

八〇年代の辭賦研究は、それまで顧みられていなかった辭賦という文體の特質を探ることと、否定的に見られていた漢賦の文學史上の價值を發掘することにその重點があつた。八四年の朱一清「近年漢賦研究總述」（前掲）は、漢大賦の評價・漢賦の諷諭・漢賦の藝術的成功などの論點について、それぞれ否定するもの・肯定するものに分けて論述している。實際、八〇年代にも、漢賦の價值を全く認めず、専ら歴史的「教訓」の對象として見るような論文があつたし、漢賦の研究者の側も、それに對抗して、まず漢賦の價值を稱揚する必要があつた。それが八〇年代後半には、「漢賦に對してさまざまな角度から肯定する人が多くなり、

別表 國際辭賦學學術研討會に提出された論文の時代別集計

	總記	先秦	兩漢	魏晉南北朝	唐宋	元明清	朝鮮・日本	計
第1回(1990)	2 (6.5%)	0 (-)	11 (35.5%)	10 (32.3%)	6 (19.4%)	2 (6.5%)	0 (-)	31
第2回(1992)	4 (11.8%)	0 (-)	11 (32.4%)	10 (29.4%)	4 (11.8%)	5 (14.7%)	0 (-)	34
第3回(1996)	6 (10.9%)	4 (7.3%)	12 (21.8%)	16 (29.1%)	12 (21.8%)	5 (9.1%)	0 (-)	55
第4回(1998)	6 (12.8%)	4 (8.5%)	7 (14.9%)	12 (25.5%)	10 (21.3%)	5 (10.6%)	3 (6.4%)	47
第5回(2001)	7 (13.0%)	2 (3.7%)	12 (22.2%)	18 (33.3%)	10 (18.5%)	4 (7.4%)	1 (1.9%)	54
(假集計) 第6回(2004)	9 (14.3%)	2 (3.2%)	16 (25.4%)	9 (14.3%)	18 (28.6%)	6 (9.5%)	3 (4.8%)	63
(参考) 簡宗梧編『中外賦 學研究評述』 (1991～1995)	32 (8.6%)	28 (7.5%)	99 (26.5%)	133 (35.7%)	69 (18.5%)	12 (3.2%)	0 (-)	373

[備考]

採録対象は、各回の會議の後に刊行された論文集(本文参照)に掲載されたものとした。ただし、第1回については、1991年の『文史哲』(山東大學)に掲載された以下の論文をも含めている。

許結「從東漢後期文學看玄儒境界——兼論漢代儒學向魏晉玄學嬗變的思想環節」(第3期)、鄭健行「律賦與八股文」、王運熙「爲漢賦家見視如倡進一解」(以上第5期)、曹道衡「略論北朝辭賦及其與南朝辭賦的異同」(第6期)

時代区分は、比較の便を考え、簡宗梧「近五年(1991～1995)中外賦學研究評述」に合わせた。「漢魏六朝」のように、二つの時代にまたがるものは、論文の内容によっていずれかに振り分け、いずれとも決めがたい場合は、前の時代に繰り入れた。三つ以上の時代にまたがるものは「總記」に含めた。

なお、第6回(2004)については、論文集を入手していないので、當日の會場での發表と、終了後會場で配布された「簡報」をもとに、假の集計を試みた。

完全に否定する人はもういなくなつた」一方、「漢大賦を肯定すると同時に、多くの研究者はさらに深く、事實に即してその思想藝術上の不足と缺陷を分析」（李生龍「近幾年の漢賦研究」、「求索」一九八八年第六期）するようになった。そして九〇年代に至ると、このような漢賦の價值づけについての議論自體がすでに乗り越えられ、研究者の關心は作品により即した問題に及ぶようになったのである。

もう一つ、それまで特定の作品や特定の問題に集中していた、いわば點としての研究が、面としての廣がりを持ち始めたのもこの時期のことである。『辭賦大辭典』（前掲）の論著目録によると、中國大陸では、一九八〇年だけで、杜牧「阿房宮賦」に關する論文が三四篇も書かれているが、この盛況は長續きしなかつた。ところが唐代以降のその他の辭賦に關する論文は、一九八〇年から一九八六年までの七年間で四八篇、その後の七年間は七七篇（發行年の不明なものを除く）で、數が増えただけでなく、取りあげられる作家・作品も多岐にわたつてゐる。かつての中國では、何か問題が持ち上がると、それをめぐつて短期間のうちに

多くの論文が書かれ、激しい論争となるが、いつのまにか沙汰やみになるといふことがよくあつた。しかし、辭賦研究に關しては、そのような現象は過去のものとなり、唐代以降は「阿房宮賦」と蘇軾「赤壁賦」に終始していた研究對象も格段に廣がつて、着實な研究が行われるようになったのである。

このような研究の成熟を背景に、これまで漢賦の研究に従事していた者は、研究範圍を他の時代に廣げつつある。たとえば、康金聲氏は、一九九二年に、それまでの研究を『漢賦縱橫』（山西人民出版社）として出版したが、九六年の第三回研討會では「論元賦特點及其歷史走向」を發表し、以後も金元辭賦に關する研究を續け、二〇〇四年に至つてその成果を『金元辭賦論略』（李丹氏と共著、學苑出版社）として出版した。ちなみに康氏は、閻鳳梧氏とともに、『全遼金詩』（山西古籍出版社、一九九九）の主編でもある。

また、漢賦に劣らぬ重要な研究領域として、とりわけ魏晉南北朝の辭賦が注目され、この時期の辭賦を専門に研究する者も増えてきた。臺灣では、以前からこの時期の辭賦

に取り組み、洪順隆氏が『辭賦論叢』（文津出版社、二〇〇〇）をまとめたほか、『庾信生平及其賦之研究』（文史哲出版社、一九八四）の許東海氏、『魏晉詠物賦研究』（同、一九九〇）の廖國棟氏、『六朝駢賦研究』（文津出版社、一九九九）の黃水雲氏らが、この時期の辭賦を博士論文の題目に選んでいる。大陸でも、『六朝辭賦史』（黑龍江教育出版社、一九九八）著した王琳氏、『六朝賦述論』（河北大學出版社、一九九八）の于浴賢氏らの専家に加え、二九歳の若さで『魏晉南北朝賦史』（江蘇古籍出版社、一九九二）を出版した程章燦氏のよりに、研究者としての出發點にこの領域を選ぶ者が現れている。ここに名を挙げた人たちの多くが、國際辭賦學學術研討會の主要なメンバーである。

唐代以降の辭賦については、専門的著作はまだ少なく、陳韻竹『歐陽脩蘇軾辭賦之比較研究』（文史哲出版社、一九八六）、洪順隆『范仲淹賦評注』（國立編譯館、一九九六）、鄭健行『科舉考試文體論稿・律賦與八股文』（臺灣書店、一九九九）など臺灣・香港のものが先行している。この時期の辭賦について論文を多く發表しているのが、『賦史』の著

紹介

者である馬積高氏、『辭賦通論』（湖南教育出版社、一九九一）の葉幼明氏、郭維森氏とともに『中國辭賦發展史』（江蘇教育出版社、一九九六）を著した許結氏など、いずれも通史を書いた経験のある人々であることは、唐代以降、とりわけ元明清の辭賦が、まだそれほど研究者の注目を集めていないことを示しているよう。それでも、二一世紀に入り、先に挙げた康金聲氏の著書が現れたほか、國際辭賦學學術研討會でも常にくつかの發表がある。第三回以降特に唐賦研究の比率が高まり、最近の第六回では、北宋の辭賦に關する發表が集中した。今後の動向が注目される。

いずれの時代においても、研究對象は名作・大作に限らず、多様な作品が新たな視點から取りあげられるようになってきている。敦煌文獻中の俗賦は、その中でも比較的早くから注目され、伏俊璉『敦煌賦校注』（甘肅人民出版社、一九九四）のような成果もあるが、國際辭賦學學術研討會では、その他の時代における俗賦にも關心が集まりつつある。第二回の王運熙「談漢代的小賦」は、漢代の諧謔的な短編の賦に着目したものであるが、あたかもそれに呼應す

るかのように、一九九三年に尹灣漢墓「神鳥賦」竹簡が出土して漢賦研究の新たな焦點となり、第三回では周鳳五「尹灣漢簡『神鳥賦』研究」が發表された（ただし論文集には掲載されていない）。以後も萬光治「尹灣漢墓『神鳥賦』研究」（第四回）、踪凡「兩漢故事賦探論・以『神鳥賦』爲中心」（第五回）などの發表がある。

俗賦以外では、郭建勛『漢魏六朝騷體文學研究』（湖南教育出版社、一九九七）が、とかく『楚辭』の亞流として等閑視されがちな漢代以降の騷體賦に焦點を當てている。先にふれた鄭健行氏の律賦研究や、詹杭倫『雨村賦話校證』（沈時蓉と共著、新文豐出版社、一九九三）『清代賦論研究』（學生書局、二〇〇二）等の賦論研究も、これまでの缺を補うものとして特筆されるべきである。これらはいずれも、この學會でその重要な部分が發表されたものである。

最近の傾向としては、辭賦を文化史全體の中でとらえようと動くきが擧げられる。たとえば、許結「說『渾天』談『海潮』——兼論唐代科技賦的創作與成就」（第四回）、黃水雲「歷代辭賦中娛樂遊戲主題初探」、余江「唐代雜技

賦概論」（ともに第五回）のように、辭賦に現れる多様な題材に着目したものや、程章燦「石學與賦學——以唐宋元石刻中的賦爲例」（第四回）、龔克昌「論兩漢辭賦與書法」（第五回）のように、辭賦と他の文化ジャンルとのかかわりを考えようとするものがある。國際辭賦學術研討會に参加を續けて実感するのは、辭賦研究が確實に新たな段階に入ったということ、そしてこの學會が辭賦研究の新たな方向を先取りしていることである。

その意味で注目したいのは、朝鮮や日本の辭賦に關する論文が發表されるようになってきていることである。韓國の學者が、韓民族の辭賦作品について發表を行っているほか、曹虹「略論中國賦的感春傳統及其在朝鮮的流行——以朱子『感春賦』與宋尤庵『次感春賦』爲中心」（第四回）及び「中韓女性與隱逸文化的結緣」（第六回）、蘇瑞隆「海外辭賦・日本平安朝『經國集』的賦篇」（第五回）のように、中國の學者もこれら周邊民族の作品を取りあげている。同様の動きは、中國の他の學會でもみられ、今後ますます加速するものと思われる。我が國でも、日本漢文に關する研

究が、日本文學・中國文學双方の研究者から注目を集めているが、今後は、國籍・專攻を異にする研究者間の學的交流を保證することが肝要とならう。その點、國際辭賦學學術研討會に期待されるものは大きい。

なお、これまで述べてきた辭賦研究の流れとは別に、洛陽大學の辭賦研究所を中心とした、辭賦創作に關する活動があるので、これについて付言しておきたい。現代の中國においても、辭賦の創作は決して滅び去つたわけではなく、第四回の南京の會議には、香港在住の辭賦作家顏其麟氏が參加した。第五回漳州會議には、次回開催豫定校として洛陽大學の副學長が列席し、閉會式では、二〇〇三年五月、牡丹の季節に洛陽での再會を期したのであった。ところが、洛陽大學では、二〇〇二年五月に辭賦に關する別の會議が開かれた。筆者は參加しなかつたので具體的な内容は關知していないが、開催わずか一ヶ月前に受け取つた招待状によれば、研究論文のほかに辭賦の創作も受け付けるとのことであつた。結局どういふ経緯か、國際辭賦學學術研討會は開かれず、急遽四川師範大學が中心となつて、二〇〇四

年の第六回開催にこぎつけたのであつた。洛陽大學では、二〇〇六年一月にも當代辭賦創作研討會を開き、二〇〇七年には『當代詠洛賦集』を出版する計畫であるという。今後とも、洛陽大學は、辭賦の創作面を中心に活動する一方、國際辭賦學學術研討會は、本來のアカデミックな路線を堅持するものと思われる。

國際辭賦學學術研討會の第七回は、甘肅省蘭州市の西北師範大學の主催で、二〇〇七年八月に開催されることが決まつている。近年、中國では學術討論會の増加もあつて、準備期間が短くなる傾向があり、論文作成に困難を感じることもあるが、この學會はおおむね一年前には第一號通知が出ており、周到な準備がうかがえる。次回研討會の第一號通知は、早く二〇〇六年二月二十八日に出されている。

西北師範大學では、『屈原與他的時代』（人民文學出版社、一九九六初版、二〇〇二第二版）を著した趙達夫教授と、先にふれた伏俊璉教授が辭賦研究の中核的存在であり、ともに出土文獻を活用した實證的研究を特徴とする。次回の會議

のテーマとしては、「賦體遡源」「敦煌賦與俗賦」「賦與詩文的關係」が擧げられているが、西北師範大學のこれまでの辭賦研究への貢獻と、現在の辭賦研究の課題とを考え合わせるに、まことに適切なテーマといえよう。實りある討論と交流が、今から待たれてならない。

〔附記〕

本來、本稿のような研究史の總括と展望は、自らの手で研究論著目録を編纂した後に書かれるべきものであろうが、筆者の怠惰の故に、數年に一度の研討會を通して見た概括的な論述にとどまってしまった。ただ、近年における研究成果の急速な増加を背景に、中國では、それまでの研究を論評した著作や、詳細な研究論著目録が相次いで作成されており、本稿の執筆もそれらに大きく助けられた。

霍松林主編『辭賦大辭典』（前掲）には、「辭賦研究論著索引」（王琳・孫之梅編）を付し、一九九三年までに發表されたもの（楚辭・屈原研究をも含む）を収録している。對象は中國大陸のほか、臺灣・香港・日本にも及び、これまでのところ、論著目録としてはもっとも完備したものである。

簡宗梧主編『近五年（一九九一—一九九五）中外賦學研究評述』（前掲）は、對象となつた五年間の、辭賦に関する著書三

八篇・論文三七三篇を集め、そのうち著書三四篇・論文二五六篇に提要を付す。冒頭に收められた簡氏の總評は、第四回國際辭賦學學術研討會で發表されたものとほぼ同一内容である。

黃霖主編、寧俊紅著『二〇世紀中國古代文學研究史・散文卷』（中國出版集團東方出版中心、二〇〇六）は、上下二編に分かれ、上編は通常いふところの散文の研究史であるが、下編（二九一—四四〇頁）が「二〇世紀中國賦體文學研究史」にあてられ、主な著作・論文を取りあげ論評している。